

国際演劇交流セミナー2014 ロシア特集Ⅱ

【ダイジェスト版】

ロシア舞台美術監督から学ぶ演劇人のための4日間 ～演劇教育発祥の地から～

ロシア・モスクワ国立マールイ劇場。このロシア演劇の殿堂で、45年の歴史すべてを支えてきた舞台美術監督、アレクサンドル・グラズノフ。ボリショイ劇場に始まるロシア舞台芸術の「核心」を直接に受け継ぐ、今やロシアでも数少ない舞台の巨匠である。このセミナーでは「美術監督と演出家」をテーマに、実技、レクチャーを通して名匠から学んだ。

企画：島守辰明 通訳：丸知亜矢

【in 兵庫】会場：兵庫県立ピッコロ劇場 中ホール 2014年8月27日（水）～30日（土）

● ワークショップ／作品の背景、演劇の背景

＜「レクチャー」と「マスタークラス」の4日間＞

チェーホフの短編戯曲『結婚申込』、短編小説『黒衣の僧』を基に、参加者もイメージ画などを事前に作成。それを基にした実技と、毎行われる演劇美術と演出の歴史についてのレクチャーを通して、体感していくワークショップ。

8月23日（土）19:00～20:00 事前ミーティング エスキースを用意するために

8月27日（水）18:00～20:30 レクチャー「美術と演出」、個人発表など

8月28日（木）18:00～20:30 レクチャー「戯曲と舞台の間に」と実技指導

8月29日（金）18:00～20:30 レクチャー「歴史と現在と」と実技指導

○ 講師 アレクサンドル・グラズノフ

写真：グラズノフ氏のレクチャー（通訳、丸知亜矢）



● 最終日レクチャー「現代ロシア演劇の美術 ～歴史の重なりと、日々の表現と～」

「現代ロシア演劇史」についての、美術を中心としたレクチャー。

（一般公開）

8月30日（土）10:00～12:00 レクチャー「製作、稽古へのプロセス」と実技指導 / 13:00～17:00 実技指導最終、合同ディベート 総評

18:00～ 劇場1階ギャラリーでのエキシビジョン / 19:00～20:00 レクチャー「現代ロシア演劇の美術」（司会：島守辰明）

● エキシビジョン

4日間を通して行われたワークショップを経た美術模型、エスキースを、ピッコロ劇場ギャラリーにて期間展示。

○講師プロフィール

アレクサンドル・グラスノフ



ロシア功労芸術家。1947 年生まれ。モスクワ演劇美術・技術大学に在学中からすでにモスクワ、マーロイ・bronノイ・ドラマ劇場を始めとしたモスクワの多くの大劇場での美術の仕事を開始。ポリショイ劇場を始めとするロシア舞台芸術における巨匠たちの、技術や美学を直に受け継ぐ数少ない美術監督である。1994 年より、ロシア国立モスクワ舞台美術大学、ロシア国立ギティス総合演劇大学にて、それぞれ舞台美術課教授を務めている。1997 年、「モスクワ建都 850 周年モスクワ記念賞」に於いて、芸術分野の一人として

栄誉ある授章を受ける。柔軟な発想力と鋭い美術観、そして品格を持つプロフェッショナリズムには定評があり、毎年モスクワで行われる全ロシア舞台美術賞では、新作の美術が常に注目されている巨匠。

細やかな意匠と大胆な抽象構成が持ち味。1969 年よりモスクワ国立マールイ劇場専属の美術監督として活躍中。

■ 代表作品…… オストロフスキー『狼と羊』『森林』、チャーホフ『かもめ』『三人姉妹』、

トルストイ『闇の力』、シェークスピア『恋の骨折り損』他多数。

ロシア特集Ⅱ【兵庫】

8月24日（土） 事前ミーティング 19:00～20:30 ピッコロシアター第一練習室

参加者14人のうち11人が集まり、エスキースについて、作品について、またワークショップ期間中に単独作業を中心にするか、演出・美術の二人組チーム作業を中心にするかなどを討議。結果、演出も美術もそれぞれ単独でエスキースを用意し臨むことにする。作品を各自1作品選び、ワークショップ当日までに自由にエスキースを用意することを課題に。また、短編小説『黒衣の僧』についても、全体を舞台にするのか、1場面を舞台にするのかなども各自の発想で用意すること。最終日と翌日に亘る、自身の展示についての説明。そして最後に、島守所有のロシア舞台美術家によるエスキース、舞台模型などを画像で紹介。

8月27日（水） 第1日目 レクチャー「舞台美術と演出」

会場となったのは、ほぼ正方形のフラット床の中ホール。口の字に並ぶ参加者のテーブルと正面に講師席、それに並んで資料画像、映像などを移すプロジェクター幕を配置。

グラスノフ「私は劇場で生まれたと言って良いでしょう。祖父母、そして父も俳優でした。母も女優でしたが、私が生まれたことで女優はやめてしまいました。」「1963年にマーロイ・ブロンヌイ劇場で働き始め、エーフロスなどの演出家と仕事を始めました。」

後に彼の作品のなかでも具現化されていく、美術の知識、演劇の知識などは彼の場合はその生い立ちからすでに育まれたと言って良い。学生時代からすでに手腕を買われて劇場の仕事に誘われ、当時としては早い、舞台美術家としても仕事を始めた。順調に仕事が続く。そのまま、引きぬかれるようにモスクワを代表するマールイ劇場に招かれる。

レクチャーの中で、幼少時代の宝物であった古い鞆、キャリアの初期に作ってきた小道具の花、などディテールの知識の積み重ねが、これから続く彼の仕事の話の背景となった。

グラスノフ氏の手によるチェーホフ『三人姉妹』の舞台美術。チラシにも掲載した舞台模型、実際の舞台の写真などを見ながら、

グラスノフ「私の祖母の家に行くと、数々の意匠を凝らした家具が大事に使われていました。こうした家具のディテール、この記憶はチェーホフ作品、特に『三人姉妹』の置かれていた当時の豊かな家庭の感触をイメージする助けになったことは言うまでもありません。祖父母の家はレニングラード、今の、またチェーホフの時代のペテルブルグでしたが、その時代の雰囲気醸し出していました。こうした雰囲気は、当時の人々の生活、登場人物の性格をも表現できるのです。」

最後に、マールイ劇場のレパトリリーの一つ、シェークスピア『から騒ぎ』の冒頭を映像で見ながら、

グラスノフ「これはマールイ劇場の別館での上演のために作られた舞台です。『三人姉妹』は本館で回り舞台もあり、奥行も大きな舞台ですが、別館はひと周り小さなサイズです。しかし、この冒頭を見ても、宮殿内の室内から庭園の開かれた舞台への速い展開が必要でした。そのためにこの場合は布を多用

しました。室内の焰、庭園の噴水、そして背景の遠近法のギャップ。」

ロシアの演劇製作において美術模型の役割は遥かに大きい。

グラスノフ「ロシアの劇場では、模型の一つ一つをそれぞれ大道具、家具、小道具、背景幕などそれぞれの工房に回されて、それをそのまま実寸大に戻して制作されます。ですから何分の一か、という計算が極めて重要で、その正確さは舞台制作プロセスを著しく左右します。」

これは、この後のワークショップ過程で大きな意味を持つことになった。

8月28日（木） 第2日目 レクチャー「戯曲と舞台の間に」

写真：画像、映像を交えながらのレクチャー

2日目は、今回の題材にしたチャーホフ作品、『黒衣の僧』『結婚申込』についてから始まった。

グラスノフ「ある作品に取り組む際に、演出家とは随分と話します。初めての共同作品なら尚更です。舞台の美術の場合、美術家の観点だけでは創れません。それは俳優たちのためであり、演出家のためであり、そして作家のためだからです。」

「私の祖父母のことを話しましたが、チャーホフの『結婚申込』でもそうでした。マールイ劇場では『結婚申込』と『熊』のチャーホフ短編戯曲を抱き合わせて『結婚！結婚！結婚！』というタイトルで上演しています。（画像を見ながら）『熊』では、チャーホフ当時流行っていた東洋趣味を部屋の装飾として全面に出しました。この作品は本館での上演でしたから廻り舞台を使います。『熊』の前に休憩をはさみず上演するのが『結婚申込』です。私は、田舎の裕福な土地持ちが登場人物の舞台として、

緑溢れる田園、庭園のあずまやを中心に据えました。これも祖母の記憶ですが、ロシアの田舎ではストーブの上に鍋を置いてジャムを手作りします。弱い火にかけて、長い時間をかけて煮詰めます。時々かき回して。（写真画像を見ながら）こうしたストーブを外に置いて鍋をかける、するとロシアの観客は田舎の手作りのジャムの香りを感じることができるのです。これも、時代と生活、登場人物の醸し出すものを手助けするものです。」

チャーホフということから、課題の作品だけでなくチャーホフの他の作品への理解も大事になる。

グラスノフ「私は『黒衣の僧』を今回のためにまた読み返しながら想像しました。この舞台は屋敷、そして僧と出逢う果樹園、庭園です。この庭園はこの小説で極めて大事なシンボルでもあります。この情景そのものに作品の哲学が現れています。作家はこうしたシンボルをよく好んで使います。私の場合、やはりマールイ劇場で上演している『桜の園』を思い浮かべました。広い果樹園。ラネーフスカヤがこう言いますね。「あそこにお母さまが歩いている。」そうした幻影が立ち現れる空間。こうした特有の共通のシンボルを作家が持っていることがあります。」

作品から作家、表現者自身、それぞれの心象を探る。これに演出家の心象も加わる。共同幻想とも言えるかもしれない。

さらにトルストイ『闇の力』での舞台美術での演出家との共同作業、グラスノフ氏自身が目の当たりにしてきたレヴェンターリを始めとする舞台美術家やエーフロス、イリインスキーといった伝説的な演出家の仕事などを、画像を交えながら語った。



8月29日（金） 第3日目 「イメージ画で現れるもの」

一通り、ロシア美術の系譜、ロシアの劇場での制作過程などを巡った後に、参加者の用意してきたイメージ画を各自発表。すぐさま、実技研修となった。

グラスノフ「例えば、机と椅子があるとして、どのようなデザインか、何が机には載っているのか、こうしたことで主人公の印象が豊かになります。」

鉛筆ですぐに一つ一つをデザイン。見逃してはならない、と参加者たちが彼の机を取り囲んだ。

グラスノフ「(モスクワ郊外メリホヴォにあるチェーホフの家記念館の画像を見ながら) 彼は医者でしたから、こうした医療道具をいつも周りに置きました。例えば、机の形。緑のビロード生地に覆われた大きめの机、これは当時の一般的な書斎机の形です。」

自由に描いていたと思われたディテールの一つ一つが、細部にまで再現された知識の蓄積の賜物だと、実感させられた瞬間だった。

グラスノフ「額縁のたくさん飾られた背景は美しいと思いました。しかしすべてが一様に小さすぎます。あるイメージを醸すなら大きさの変化とバランス、そして額縁の中を例えば実際の木々の一部を入れたらどうでしょう。チェーホフは白樺を心から愛していました。額縁の一つ一つが主人公の心象であれば、物語の進行によって額縁の中身を変えたらどうでしょうか。」

「他の場面はどう利用するのでしょうか。舞台の場合、特に現代の美術では転換の速さも重要です。こうしたセットを基軸にどう変化していけるでしょうか。俳優の位置、動線との関わりの変化はどうでしょうか。」

写真：一人一人のイメージ画からすぐに展開するディテール



写真：グラスノフ氏のペン先に参加者が目を瞞る

参加者も次第に、これはイメージ画よりも舞台模型を基にした方が、具体的になるのではと思い始めていた。

今回のワークショップでは当初、舞台模型作製までの時間は足りないのではと思われたが、段ボールや画用紙などを使って作ることをグラスノフ氏からも提案。

「どれぐらいのサイズの舞台で上演されるかがとても大事です。」

実際の中ホールの図面をコピーし、それぞれに配布。翌日の最終日に時間をかけて各自模型作製にチャレンジすることとなった。

8月30日（土） 第4日目 実技指導「舞台美術模型を作る」

翌日、時間のない参加者ではあったが、各自、イメージ画を基にした模型を作製。

グラズノフ「『結婚申込』を題材にしたイメージを見て）センター奥に入口がありますね。扉は一つでしょうか？ 演出家のためには、登退場口、動線にバリエーションが豊かな方が良いと思います。」

「外に白樺、部屋中との境界が閉ざされていないアイデアは気に入りました。しかし、壁の色がピンクですね。私ならこの配色にはしません。『三人姉妹』でナターシャが着てきた服にオリガが言いますね。「それは良くないわ」あの時、ナターシャはピンクのドレスに緑のベルトをしていました。つまりチェーホフはこの色合わせが嫌いだったと思うんです。」

さらに、部屋の中がとかくシンメトリーに置かれているのに対して、椅子のデザイン、壁に架かるものなど、変化を起こすことで空間のあり方が雄弁になった。

一人一人の模型制作を見て回り、試行錯誤が練られた。こうした作品の変化を、劇場1階のギャラリーで始まった展示に、参加者当人の解説付きで展示をした。ロシアの演劇美術の歴史、ロシアでのチェーホフ上演作品を美術家別、時代別にカテゴライズしたコーナー、グラズノフ氏のマールイ劇場での仕事の様子を辿ったコーナー、などと併せた展示には40名弱が観覧した。



写真：参加者は各々のイメージから模型を作製。
それをさらに拓げていくグラズノフ氏



写真：ロシアを代表する舞台美術家たちのイメージ画、舞台模型など。
ワークショップのレクチャーでも紹介された美術家たちの紹介。

8月30日（土）夜 第4日目夜 レクチャー「ロシア舞台美術の現在」

ワークショップでも一部紹介されたロシア舞台美術の歴史、それは天才的でありながら職人芸とも言える美術家と演出家によって紡ぎだされた歴史。とくにそうした美術家のイメージ画、美術模型写真、そして上演写真を通しての変遷は、そのままエポックメイキングとなった上演史と重なる。

今回は特にマールイ劇場でグラスノフ氏の美術による、ゴーゴリ『検察官』を例に解説された。美術模型の画像、劇場での演出家、俳優たちへの美術披露風景、そこにはマールイ劇場の芸術監督で、日本でも黒澤作品『デルス・ウザーラ』などの主演で知られる『検察官』の演出を手掛けたユーリー・ソローミン氏との話も挟まれる。

最後にこの作品の上演映像を観ながら、回り舞台を駆使して情景の変化を観た。幾つかに見えていたものが、実は一つのものを巧みに計算されてバリエーションを見せるなど、アイデアが重層化されていることが良く分る映像だった。

夜のレクチャーではチェーホフ作品を良く知る方も多く聞きに来られた様子で、初めて観るイメージ画や映像に興味津々の反応であった。

8月30日～31日 劇場1F ギャラリーにて、展示が行われた。

- ・ 参加者創作作品（参加者自身によるイメージ画や模型を本人の記録解説付きで）
- ・ ロシアワークショップ概要（ワークショップ風景写真を解説付きで）
- ・ マールイ劇場でのグラスノフ氏の仕事風景（作業の写真などを解説付きで）
- ・ ロシア舞台美術家の作品紹介（エスキースを中心に）
- ・ チェーホフ作品上演の際の、歴代ロシア舞台美術家の歴史（イメージ画を中心に）